京都ファインアーツ・ブラス 第13回演奏会

Kyoto Fine Arts Brass
13th Concert

2005.12.4（日）午後１時30分開場　午後２時開演
ムラマツリサイタルホール新大阪

主催：京都ファインアーツ・ブラス

ご あ い さ つ

本日は、私たち京都ファインアーツ・ブラスの演奏会にお越しくださいまして、ありがとうございます。

京都ファインアーツ・ブラスの活動も10年を過ぎ、団員は公私ともに充実かつ多忙なときを迎えています。従来から続けてきた練習の形である月１回の土日合宿への参加も、思うように人数が集まらないときが増え、演奏会自体の開催の是非を議論した時期もありました。しかし、全員集まることが難しい状況にあるのは誰もが認める中、やはりアンサンブルをしたい、みんなと一緒に音楽を創っていきたいという気持ちは皆同じでした。様々な制約がある中で、寸暇を惜しみ、今できる限りのことを行ってきた結果、この日を迎えられることを団員一同とても嬉しく思います。

今回のプログラムでは、以前から積極的に取り組んでいるクツィールの新たな作品を取り上げました。クリスマスキャロルをテーマにした素晴らしい作品です。まだ12月になったばかりですが、他にもクリスマスにちなんだ作品を取り上げ、少し早めのクリスマスの雰囲気を皆さんと楽しみたいと思います。また、ブラスアンサンブルの世界では定番とされるスザートやヘーゼルの作品、ルネサンス時代の作品から現代の作品まで、そしてヨーロッパ及びアメリカの作品と、幅広くプログラムに盛り込みました。金管楽器のみという限られた楽器編成であっても、多彩な音楽をお楽しみいただけるものと思います。

今まで、団の名にもある京都を中心として、名古屋、滋賀などで演奏会を行ってきましたが、京都のすぐ隣の地でもある大阪で演奏会を行うのは、意外にも今回が初めてになります。少しずつでも京都ファインアーツ・ブラスの演奏をより多くの人に楽しんでもらいたい、そんな思いで、この大阪での演奏会を一つのステップにして今後の活動につなげていきたいと思います。

京都ファインアーツ・ブラス

Program

G. ガブリエリ：「カンツォーンとソナタ集（1615 年）」より ソナタ第 13 番

Giovanni Gabrieli：Canzone e Sonate (1615) SONATA XⅢ

B. バルトーク：「こどものために」より

Bartók Béla：“Gyermekeknek” ból

F. ペーテルス：4 本のトロンボーンのための組曲 作品 82

Flor Peeters：Suite Quatuor pour 4 Trombones Op.82

T. スザート：「ダンスリー」より 6 つの舞曲

Tielman Susato：Six Dances from “Danserye”

Pause

C. ヘーゼル：あと 1 匹の猫「クラーケン」

Chris Hazell：Another Cat “KLAKEN”

G.W.E. フリードリヒ：アメリカン・ブラスバンド・ジャーナル

G.W.E. Friederich：American Brass Band Journal

J. アイヴソン：クリスマス・クラッカー

John Iveson：Christmas Crackers

J. クツィール：クリスマスキャロル組曲 作品 97

Jan Koetsier：Weihnachtslieder—Suite Op.97

演奏曲目について

ジョヴァンニ・ガブリエリ ：「カンツォーンとソナタ集（1615 年）」より ソナタ第 13 番
Giovanni Gabrieli： Canzone e Sonate（1615）SONATA XⅢ

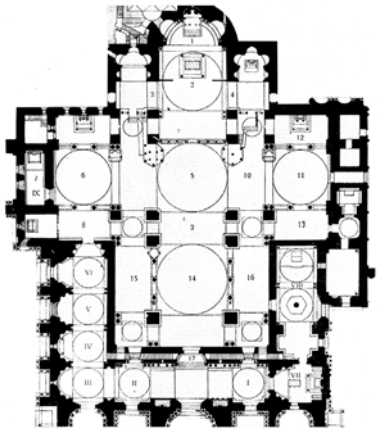
ジョヴァンニ・ガブリエリは1600年前後に活躍したイタリアの作曲家です。叔父であるアンドレア・ガブリエリより教育を受けた後、ミュンヘンに出て、バイエルンの宮廷楽団に数年間加わり活躍しました。1586年からはアンドレアの後任としてサン・マルコ大聖堂の第一オルガニストに就任し、演奏及び作曲活動に専念しました。

彼が活躍していたヴェネツィアは商業都市として繁栄しており、交易が盛んに行われると共に各国の文化も流入し、それを洗練して独自の文化を作り上げていきました。宗教音楽においても、当時ローマにおいて完成された無伴奏の多声音楽ではなく、自由で色彩的な器楽伴奏を伴う作品が好まれました。そのような気風を背景に、合唱団を二手に分割する復合唱の手法が試みられ、2 つのグループの対比と融和による効果的な演出が生み出されました。彼はこの手法を発展させて、“Cori Spezzati”（分割された合奏体という意味のイタリア語）様式と呼ばれるひとつの様式を確立させました。

この“Cori Spezzati”という様式は、サン・マルコ大聖堂の独特の構造（祭壇の左右の上方に各々オルガン・聖歌隊・器楽の席が設けてある）を生かした作曲法で、合唱団や合奏が 2 つあるいはそれ以上のクワイヤ（グループ）に分かれて、互いに歌い交わしながら曲を進行させていきます。合奏隊が複数のクワイヤに分かれる事で、音楽を有機的に構成していく上でのさまざまな新しい可能性が生まれました。たとえば音量の問題だけをとってみても、2 つのクワイヤが交互に演奏する部分と、同時に演奏する部分を組み合わせることだけで、単一では得られない響きの変化が現れます。それはちょうどオルガンのストップを引いたときのような音色の対比効果が得られ、音楽表現の幅が広がりました。

サン・マルコ大聖堂の外観：4 つの丸屋根が特徴

彼の代表的な作品としては、1597年に刊行された「サクラ・シンフォニア集Ⅰ」や彼の死後1615年に弟子たちによって刊行された「サクラ・シンフォニア集Ⅱ」、「カンツォーンとソナタ集」があり、彼の教会音楽の集大成として現在に伝えられています。今回演奏する「ソナタ第13番」は「カンツォーンとソナタ集」の中の 1 曲です。この曲は第 1 クワイヤによる 4 拍子のもの悲しい旋律で始まり、一転様相を変え 6／4 拍子の特徴的な主題を全体が奏でます。すぐさま左右のクワイヤの対話と全体合奏が繰り返され、最後は左右のトランペットにより駆け込むように劇的に幕を閉じます。又、この曲は各主題間に間（ま）が効果的に用いられています。非常に響きが豊


内部平面図：キリスト像を頂点とした十字架形からなり、十字架の左右両端にクワイヤを配置

かなサン・マルコ大聖堂での演奏を意識して作られた作品であると考えられます。
　大阪はたくさんの運河に囲まれ、商業・交易が盛んだったことから、「日本のヴェネツィア」とも例えられています。ヴェネツィアで響いていたガブリエリの音楽により、ここ「水の都」大阪での演奏会の幕を開けます。

バルトーク・ベーラ ：「こどものために」より
**　Bartók Béla：“Gyermekeknek”ból**

　バルトーク・ベーラ。偉大なるその名前に皆さんはどんな印象をお持ちでしょうか。複雑で難解、斬新で奇抜、それとも、情感深さや生き生きとした民族音楽の旋律が思い浮かぶでしょうか。もし、バルトークの音楽が苦手という方がいらっしゃったら、是非、接して欲しいのがこの『こどものために』です。

　ハンガリーの偉大な作曲家、民俗音楽学者、そして優れたピアニストであったバルトークは、1881年に現在のルーマニア領ナジュセントミクローシュに生まれました。共に音楽を愛する両親のもと、音楽的に恵まれた環境で幼少時代を過ごし、18歳のときにブダペスト王立音楽院に入学しました。折しもハンガリーがオーストリアから独立する気運が高まっていた時期でもあり、初期にはドイツロマン派風の作風でしたが、自国の新たな音楽を創造する決意を固めます。やがて彼は僚友コダーイと共にハンガリー民謡の採集を始め、1930年代には続々と傑作を生みだしました。しかしハンガリーがファシズムに脅かされるようになったため、彼はアメリカへの亡命を決意。アメリカでは白血病に冒され、失意の中で1945年ニューヨークに没します。

　ハンガリーの政治的な波に翻弄され、切望しながらも最後まで国に戻れなかったバルトークですが、ハンガリーでは今でもとても愛されています。それは、単に有名な作曲家としてではなく、また、学者、教師としてでもなく、ハンガリー人として、人としての彼そのものが愛されているのです。子ども達は「私たちのバルトーク」と誇らしげに言いますし、教科書にはレポートが載っています。もう少し大きな子ども達や高校生は「バルトークのようになりたい」と言います。現在でも演奏会でバルトークの曲が演奏されると、聴衆はまるで自分たちの新しい国歌を聞くかのように、深く、感動を持って聴きます。
　つまり、バルトークは作曲することで、音楽の言葉を用いて子ども達に語りかけ、自国の子ども達の将来のために生きたと言えるのかもしれません。この曲集はバルトークが生涯をかけて行った民俗音楽収集の成果です。と同時に、忘れてはならないのは、都会に生活する子ども達に、音楽を通じてハンガリー平原の農村の空気を届けた“子どものため”の最も大切な作品だということです。

　作品は、79曲から成るハンガリー民謡やスロヴァキア民謡に基づいたピアノ小品集です。実際に農村で採集された民謡や子どもの歌の旋律が、ほぼ原型のまま引用されているのが特徴で、バルトーク独特の近代的な和声に包まれることにより、親しみやすい民謡の旋律の素朴さがより浮き立つという独特の魅力を持っています。
　そして日本人として興味深いのは、ハンガリー民謡の中に日本的な旋律とどこか似ているものが見られることです。その旋律が私たち日本人の耳に馴染み優しく響くのは、ハンガリー人が、実は私たちと同じアジアを起源としている民族だからかもしれません。日本の民謡やわらべ歌にみられる 5 音音階が、同じようにハンガリー民謡に多く使われているからこそ、私たち日本人は親しみやすさを感じるのです。
　実は我が家には 2 歳の娘がいるのですが、練習場所で『こどものために』の曲を耳にするうちに、他のどの曲よりも早くこの旋律を覚え、日常生活の中で楽しげに口ずさむようになりました。またこの音楽を聞きながら、リズムに合わせて踊ったり、はしゃいだりする子どもの光景もみられました。子どものために作曲されたこの曲集は、親しみを感じやすいだけでなく、あふれんばかりの生命力と、純粋な感情がとことん込められてい

るからこそ、それを純粋に感じ取った子ども達は歌い、踊りださずにはいられなかったのでしょう。

今日は、バルトーク自身に生涯「もっとも好きな作品」と呼ばれ愛されたこの曲集から 5 曲を演奏します。

5 番 Játék「遊び」
断食の日の午後、美しい民族衣装の晴れ着を着た女の子たちが遅いチャールダーシュ（ハンガリーの代表的な民族舞踏）を踊りながら歌います。断食の祝儀では、美しい旋律の子どもの歌が数曲並べて歌われましたが、アレグロの旋律とピゥ・モッソの旋律の 2 曲が繋がれて 1 曲として伝承されています。

17番 Körtánc「円舞」
輪になって隣同士手をつないで回り踊る遊戯歌。元来は婚礼の歌であったが、子どもの歌として伝承されています。この美しく心地よい響きの旋律は、今でもハンガリーの子ども達に広く愛されています。

14番 無題
現在のルーマニア領であるチャナード村のガチョウの様子を、舞踏と共に歌った冗談歌。

11番 無題
日本で馴染みのある「はないちもんめ」に似た遊び歌。子ども達が手をつないで 1 列に並び、その向いにも並び、皆で手をつないで歌います。いなくなった美しい娘を返しておくれという内容の歌詞。

21番 無題
村の酒屋で酔っ払いの男たちが賑やかに歌い騒いでいる歌。元気で陽気な舞踏のリズムをもつ旋律。

バルトークが子ども達に語りかけていることは、本当は彼が大人に大人として語りたい事柄なのかもしれません。私たちはどれだけバルトークの言葉に耳を傾け、音楽を奏でることができるでしょうか。いざ、ともにバルトークの世界へ！

フロール・ペーテルス ：4 本のトロンボーンのための組曲 作品 82
Flor Peeters：Suite Quatuor pour 4 Trombones Op.82

弾むリズムとハーモニーで私たちをひきつける音楽。かと思えば、ゆるやかで歌曲的な優しいメロディー。ペーテルスのこの曲は、トロンボーンの重要なレパートリーとして、演奏会によく取り上げられ、親しまれています。

彼は、1903年アントワープ地方のティーレンに生まれたベルギーを代表する音楽家で、メケレンとパリで作曲とオルガンを学びました。大聖堂のオルガン奏者、音楽学校の教師、作曲家など、様々な面を持ち合わせたペーテルス。「表現される音楽は、まるでその作曲者自身を表すものであるべきだ」という考えを持っていた彼は、オルガン奏者として、確実に、謙虚にその任務に尽くしたようです。また、その中で、フランドル楽派、古代聖歌の音楽を学んでいきます。
作曲家としてのペーテルスは、オルガンのための曲ばかりでなく、オルガンと他の楽器によるアンサンブル作品も数多く残していますが、その中で、1955年に往年の名奏者エドワルド・デ・ハース率いるトロンボーン 4 重奏団のために書いたこの組曲は、彼が残した作品の中でも特に珍しいものといえます。

彼はとても真面目な性格で、作曲家として作品を書くことを仕事とし、それに没頭しました。そしてバルトークと同じく、ロマン派音楽や近代音楽が次第に調性感や形式感を失っていったことへの反動から、古典派音楽のような

形式感を取り戻そうと努力した、いわゆる新古典派音楽の作曲家の一人です。
　そんなペーテルスの作品は、「全体でのまとまり、形式美を追求した」面と、それに対する「強く動くリズムと、激しい叙情」の両面を兼ね備えたものであり、そのコントラストが彼の音楽の魅力であるといえるでしょう。この組曲は、完全なソナタ形式で書かれ、彼の真面目さ、堅実さ、フランドル楽派の音楽家たちに対しての敬意がとてもよく伝わってきます。

　その生真面目な性格の一方で、愛煙家であり、ワインを味わい、また料理などを好む等、世俗的な一面も持ち合わせていたペーテルス。今回この曲を演奏する私たちも、愛煙者がいたり、ワインにこだわりを持っていたり、料理をすることが楽しかったりします。そんな訳で、ペーテルスにとても親近感を覚えると共に、また同じ音楽を愛する者として、そんな彼が作曲したこの曲を、時代を超えて、今日演奏できることを嬉しく思います。

1. Entrata「イントラーダ」
   バスの短くも力強く印象的なテーマに続き、テナー 3 本が呼応します。その後、主役はテナー 3 本に移り、バスはその旋律に応えるように曲は進行していきます。一旦 4 本が融合するも、又バスとテナー 3 本の対比に移り、華やかに幕を閉じます。
2. Lied「歌」
   1 曲目とは一転して、ゆるやかな歌となります。どこかで聴いたような懐かしい旋律。古代聖歌を学んだペーテルスならではの作風が現れています。メンバーの中には「この曲の原曲がオランダを経由して幕末に日本に流れ、日本の歌の元になったのでは？」と主張する者も・・・。
3. Dans「ダンス」
   その名のとおり「踊り」の音楽。どのような踊りを意識して作られたのかは定かではありませんが、複雑なステップとジャンプが組み合わされたような軽快な踊りが想像されます。
4. Final「終曲」
   フランドル地方の太鼓を思わせる、2 本のトロンボーンのリズムに乗って、ソロトロンボーンが情熱的に歌います。バスがそれに呼応しながら進み、曲を閉じます。

ティールマン・スザート ：「ダンスリー」より 6 つの舞曲
Tielman Susato：Six Dances from“Danserye”

　今からちょうど30年前の1975年の 5 月に、フィリップ・ジョーンズ・ブラス・アンサンブル（PJBE）はスザートのダンスリーを録音しました。そう、美しく青いジャケットの「華麗なるルネッサンスの響き」です！本日の演奏は、その日から始まっていたのです（えっ、まだ生まれていない？）。PJBEは、私たちがよく練習を行っている三重県鈴鹿市にも1976年10月17日（日）にやって来ました！当時高校生だった M さんは部室にそのポスターが貼られていたにも関わらず聴きに行きませんでした。しかし、後日放映されたテレビ番組（白黒）を見て衝撃を受けた彼は、このLPレコードを買いに走ったのでした。・・・とか何とかいうような話は山ほどあるのではないでしょうか？ 多くの金管奏者を魅了したこのダンスリーは、全国津々浦々にブラスアンサンブル好きやスザート愛好家を生み出しました。

　さて、本題ですが、ティールマン・スザートは1500年頃にケルン近郊のゾーストという小さな町で生まれ、1561～64年頃にベルギー北部のアントワープで亡くなりました。ドイツ生まれのドイツ人ですが、音楽活動の

拠点はフランドル地方の中心地アントワープで、大聖堂でのトランペット奏者などを務めた後、1549年まで町の楽士を続け、1543年から1561年まで楽譜出版業を営みました。その間に25巻のシャンソン曲集、3巻のミサ曲集、19巻のモテット曲集、11巻の〈音楽集〉などを出版しました。

この11巻の〈音楽集〉のうちの〈音楽集第3巻〉"Het derde musyck boexken"には、フランス、オランダ、ドイツの民謡の旋律に基づいて、スザートが編曲した4声の舞曲が59曲収録されています。いずれの曲も、短くも親しみやすい旋律が反復される構成で書かれています。これらは、「あらゆる種類の楽器で演奏することに適しており、楽しむためのもの」でした。例えば、アルト～バス音域の大型楽器による編成で演奏したり、それよりオクターブ高いソプラノ～テノール音域でのよく響く小型楽器による編成で演奏することも可能です。それは、トランペットやサックバット（トロンボーン）であったり、リコーダー、クルムホルンなどの古楽器、その他の管楽器や弦楽器など、どのような楽器構成でも演奏は可能で、その変化が非常に魅力的です。また、出来る限り太鼓、ティンパニ、トライアングル、シンバル、グロッケンなど多様な打楽器を用いることが望ましく、特に、太鼓とタンバリンは当時不可欠な楽器とされていて、これらの舞曲に特別の魅力を与えています。

PJBEが演奏してから30年を経て我々KFABも初めて取り上げます。ジョン・アイヴソンが金管10重奏用に編曲したこの曲は、これまで多くの演奏家たちが取り上げていく中で、様々な工夫やアイデアを盛り込んだり、原典に即することでこの曲の魅力を存分に引き出してきましたし、より魅力的な演奏をすることも考えられます。本日の演奏に向けて、アイヴソンが編曲した楽譜を元に、原典の意図も尊重しつつ、みんなで議論・研究・試行を重ね、私たちなりの音楽を作ってきました。私たちが長年創り上げてきた想いを込めて演奏いたします。お聴きいただく皆様にも是非ともお楽しみいただきたいと思います。

クリス・ヘーゼル ：あと1匹の猫「クラーケン」
Chris Hazell：Another Cat "KLAKEN"

この曲は、イギリスの作曲家クリス・ヘーゼルがPJBEのために作曲した"Cats Suite"（猫の組曲）の中の1曲です。「猫の組曲」はブラス・アンサンブルの曲の中で、最も有名な曲のひとつと言っていいかも知れません。

クリス・ヘーゼルは、1948年にイギリスで生まれ、王立音楽大学で作曲とオルガンを学んだのち、録音プロデューサーとして働きながら多くの作品を残しています。彼は、多くのアーティストのために作曲や編曲をしましたが、なかでもPJBEのために多くの作品を作曲しています。

PJBEは1951年にトランペット奏者のフィリップ・ジョーンズを中心に結成されたイギリスのブラス・アンサンブルで、この分野のパイオニアとして世界的に活躍しました。日本には1974年に初めて来日し、彼らの華麗でわくわくするような演奏は、日本でブラス・アンサンブルの大ブームを巻き起こしたほどでした。

彼らから影響を受けたのは私たちも例外ではありません。PJBEのテューバ奏者ジョン・フレッチャーの音に憧れ、数年越しで同じ楽器を手に入れた者がいたり、トロンボーン4重奏だけに向いていた興味を大きく広げてもらった者がいたり・・・。何より、PJBEが録音した「ロンドンの小景」という曲を演奏したい、というのがKFABの始まりであり、アンサンブルの楽しさ、素晴らしさを知るきっかけを作ってくれたのが彼らでした。

1997年に来日されたフィリップ・ジョーンズ氏とお会いしたときの想い出は、今でも私たちの大切な財産となっています。

「猫の組曲」の構想は、PJBEのバス・トロンボーン奏者レイモンド・プレムルが作曲した「ブルース・マー

チ」の姉妹作品の作曲を、ジョーンズがヘーゼルに依頼したことから始まったもので、最初の曲はヘーゼルが飼っていた猫の名前にちなんで「ミスター・ジャムス」と名付けられました。この曲が非常に好評だったため、当時ヘーゼルが一緒に住んでいた 4 匹の猫をモデルにしてまとめたのが「猫の組曲」です。

本日演奏する曲は、最初にヘーゼルと同居することになった猫が主人公です。とても小さなメスの野良猫で、体を丸めて縮こまって寝ていると片手にのる程小さかったのですが、他の猫（ミスター・ジャムス，ブラック・サム，バレジ）の誰よりも気位が高く、気が強く、ボス的な存在なので、冗談でノルウェーの伝説上の巨大な海の怪物にちなんで「クラーケン」という名前がつけられました。

さて、みなさんが想像するクラーケンはどんな姿をしていますか？ 本日は、彼女の気取りつつ気が強い挑戦的な姿を、KFABのイメージで表現いたします。

G.W.E. フリードリヒ ：アメリカン・ブラスバンド・ジャーナル
G.W.E. Friederich：American Brass Band Journal

「バンド・ジャーナル」って知っていますか？ 吹奏楽にかかわったことのある人なら、誰もが手にしたことがある月刊誌ですよね。吹奏楽コンクールの結果発表や講評、コンサート情報、ワンポイントレッスン等、ありとあらゆる吹奏楽の情報が盛り込まれており、愛読書とされている方もおられるのではないでしょうか。では、アメリカン・ブラスバンド・ジャーナルって？ アメリカのブラスバンドの雑誌？

本日ここに取り上げる曲は、アメリカでブラスバンドが最も盛んだった1853年に発行された、アメリカン・ブラスバンド・ジャーナルの中から選んだものです。そう、このジャーナルは情報誌というより、優れたレパートリーを供給する目的で発行された「曲集」ということになります。その作／編曲をフリードリヒが担当しました。このジャーナルは、1855年まで続きましたので、その間に24集にも及ぶ多数の曲が発行されました。おもしろいのは、当時バンドは、行進をしたり野外で演奏することが多かったので、楽譜は楽器の譜挟みに挟めるよう、ポケットサイズで印刷されていたそうです。

アメリカに初めて吹奏楽が導入されたのは、18世紀中ごろでヨーロッパではハイドンやモーツァルトが活躍する頃でした。イギリスの軍楽隊がボストンに進駐して演奏会を開いたのがきっかけで、たびたび演奏会を開催してたいへんポピュラーになりました。当時はオーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルン、打楽器などからなる小編成でしたが、19世紀に入り1834年頃から、金管楽器だけによる、いわゆるブラスバンドが編成され、それが各地で普及していきました。このジャーナルは、その最盛期を選んで発行されたわけですが、曲集の内容は、主としてクイック・ステップ、マーチ、ポルカ、ワルツ、歌曲など軽い曲から成っていて、当時アマチュアからプロに至るまで、あらゆるバンドで演奏されました。

しかし、1859年頃には、その編成に木管楽器を加えウィンドアンサンブルへと編成替えされていき、アメリカのブラスバンドは転換期を迎えることとなり、その全盛期はわずか25年で終焉を遂げることとなりました。

作／編曲のG. W. E. フリードリヒは、アメリカの吹奏楽史の文献の中にもその名前が見当たりませんが、当時ニューヨークで活躍したドイツ人管楽器演奏者の一人であったことは間違いないようです。同じ頃ニューヨークには、ドイツ人で編成されたブラスバンドが幾つか存在していたようですから想像に難しくありません。また、この頃活躍した、アメリカを代表する作曲家フォスターも大いにかかわりがあったことも書き加えておきます。

本日は、アメリカ吹奏楽の原点ともいえるこの小品集を、KFABの５人のメンバーによって演奏します。プロもアマもこぞって演奏するほどの親しみやすさが、会場に伝わりますように。

ジョン・アイヴソン：クリスマス・クラッカー
John Iveson：Christmas Crackers

クリスマスまで残すところ１ヶ月をきりましたね。クリスマスと聞いて連想するものはたくさんあります。サンタクロース、プレゼント、パーティー、ケーキなどなど・・・。イギリスのクリスマスは、クリスマスツリーやカードを飾ったり、家族が集まって七面鳥やクリスマスプディングを用意してお祝いをしたりするそうですが、そのテーブルの横には必ずクリスマスクラッカーが置いてあるとか。「クリスマスクラッカー」というと、一般的には、円錐形の先についている紐をひくとパンと音がして華やかなテープが飛び出してくるものが浮かんでくるかと思います。しかし、イギリスのクリスマスクラッカーは、円錐形ではなくカラフルな包装の筒状の形をしています。２人がそれぞれの端を握って引き合うと、パンという音と同時に中からは紙でできた帽子や小さいおもちゃ、ジョークの書かれた紙などが飛び出すという楽しい仕掛けになっています。

この「クリスマスクラッカー」というタイトルをつけてクリスマスソングをブラス・アンサンブル用に編曲したのは、ジョン・アイヴソンです。彼はイギリスの王立音楽大学で学んだのち、1965年にBBC交響楽団の副首席トロンボーン奏者としてプロとしての仕事を始めました。1969年にロイヤル・フィルハーモニー管楽団の首席奏者となってからの数年間は、PJBEのメンバーとして世界中を巡業しました。1980年から1991年までは、コヴェントガーデン王立歌劇場管弦楽団の首席トロンボーン奏者として活躍し、また王立音楽大学の教授の座にもつきました。彼は現代におけるブラス・アンサンブルを開拓し、数々の素晴らしい作品を残しています。私たちは過去の演奏会で彼の編曲による作品に何度か取り組みましたが、その音楽の面白さにはいまも魅了され続けています。

本日は、教会や野外で歌われるクリスマスソングや素朴で飾りのない賛美歌が、彼の手によって、イギリスのクラッカーの中身のように楽しくわくわくするものに編曲された曲を演奏します。それは、ブラス・アンサブルの響きの美しさやおもしろさ、そしてクリスマスキャロルの魅力を、奏者に、そしてお聴きの皆様にも十二分に感じさせてくれることでしょう。

1. Jingle Bells－Deck the Halls
「Jingle Bells ジングルベル」（ビアポント作曲）の有名なフレーズが、ベルトーンで美しく鳴り響き、や

がてホルンの歌ではじまります。自然な流れで、「Deck the Halls ひいらぎ飾ろう」（イギリスのウェールズ地方の民謡）にうつりかわり、ホルン、トランペット、テューバの順で素朴に歌われ、やがて 5 人による輪唱により最大のクライマックスを迎え、また、最後は「ジングルベル」で静かに終わります。

2. A Carol Fantasy

「Angels from the Realms of Glory あら野のはてに」（フランス民謡）「グローリア」の有名なサビのリフレインで美しく始まります。「Away in a Manger 馬糟（まぶね）の中で 」（カークパトリック作曲）にうつりかわり、ホルン、トロンボーンがしっとりと歌います。「God Rest Ye Merry Gentleman 世のひと忘るな」（イギリス民謡）はテューバのソロで始まり、合いの手で入る♪が、滑稽さを表します。やがて音楽は加速し、「Good King Wenceslas ウェンツェル王様は」（イギリス民謡）は、スピーディーに華やかに歌い上げて終わります。

3. We Wish You A Merry Christmas

「We Wish You A Merry Christmas おめでとうクリスマス」（イギリス民謡）2 本のトランペットがデュエットで歌います、トロンボーン、ホルンと旋律がうけつがれ、最後は全員でスウィングのリズムにのり、ブラス・アンサンブルならではの重厚な響きで終わります。

さて、アイヴソンが作り、KFABがひいたクリスマスクラッカーからは、どんな色でどんなしかけのある音楽が飛び出すのでしょうか・・・。パーティーや宴会が大好きな私たちですから、クリスマス21日前の今日を盛り上げるために、とっておきのクラッカーを鳴らしてみせましょうか。せぇーのー、ばーーーーん

ヤン・クツィール ：クリスマスキャロル組曲 作品 97
Jan Koetsier：Weihnachtslieder - Suite Op.97

ヤン・クツィール。彼のブラスに対する深い愛情、先人の大作曲家への畏敬の念を込めた作品に引き込まれ、私たちは彼の作品を精力的に取り上げてきました。ブラス・シンフォニーに始まり、ツヴァファッヒャー、小組曲、ソナタ・プライクラシカと演奏を重ねる度に新鮮な思いと懐かしい思いにかき立てられます。

1911年オランダのアムステルダムに生まれたクツィールは、ベルリンで作曲と指揮を学び、アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団、バイエルン放送交響楽団というオランダとドイツを代表するオーケストラの指揮者を務めた後にミュンヘン音楽大学の教授に就任しました。バイエルン放送交響楽団時代には、指揮者として来日しています。その職を退いた後は、バイエルン北部に居を構え、なんと94歳になる現在も作曲活動を続けているのです。

さて、ドイツなどでは12月が近づくと、あちらこちらの街でクリスマスの飾りつけがなされ、多くの屋台がひしめき合うクリスマス市が立ちます。この季節のヨーロッパはとても寒く夜が長いのですが、人々はその市に集い、グリュ・ワイン（暖めて飲むために造られた甘目の香辛料入り赤ワイン）で身体を温めながら語り合います。そして、そんな街角では、いろいろなスタイルでクリスマスキャロルが演奏されます。

洒落たトナカイのジャケットが印象的なPJBEのクリスマス・アルバム“NOEL！”の解説には、一昔前のロンドンでのクリスマスの風景が書かれていて、クリスマスキャロルがいかにヨーロッパの人々の中に溶け込んでいるかをうかがい知ることができます。数多くのブラス・アンサンブルが、伝統的なクリスマキャロルや、ガブリエリ、シャイト、バッハなどのクリスマスに因んだ曲を実に様々な編曲で録音しているのもそのような伝統に根差したものといえるでしょう。

この組曲は1983年の作品で、トロンボーンの名手であるアルミン・ロジンが率いるシュトゥットガルト・ブラス・フィルハーモニーのために作曲されたものです。トランペット 4 本とトロンボーン 4 本という直管楽器だけによる伝統的な編成が用いられています。しかし、そこは現代の金管楽器を知り尽くしたクツィールのこと、広い音域とミュート（弱音器）の活用によりたった 2 種類の楽器による合奏とは思えない様々な音色を駆使して、伝統的なキャロルのメロディーに現代的な味付けを施しています。

先日偶然にもこのロジンさんのトロンボーン・リサイタルがあり、KFABメンバーも聴きに行ってきました。素晴らしい演奏のあと、今度私たちがこのクツィールの作品をすることを伝えると、それまでやや気難しそうな表情のロジンさんが満面の笑みを浮かべ、「彼とは旧来の大の仲良しだ。この作品も素晴らしいだろう？これは俺たちのために書いてくれたんだ」と得意気に話し、突然トロンボーン 4 重奏から始まる「きよしこの夜」をよく響く太く温かい声で歌い出しました。合いの手の分散和音の伴奏も「ぽぽぽぽぽぽ～～ん」なんて挟みながら・・・。別れ際に「頑張れよ！」とさっと無骨な右手を出してくれて握手をしました。

初演の奏者から激励の言葉を頂き、今回演奏できることが楽しみでなりません。

クツィールは、バッハやヒンデミットの影響を大きく受けており、この作品にもそれらが散りばめられています。全部で 8 曲からなる組曲の中から、本日は以下の 5 曲を演奏します。

なお、第 1 曲と第 8 曲の「クオドリベ」というのは、「ごたまぜ」、「寄せ集め」とか、「メドレー」という意味のドイツ語ですが、16～17世紀に流行した有名な旋律を次々と組み合わせたり、同時に演奏されるものを指していて、バッハも作品の中に採り入れています。ラテン語では「お好きなように」という意味に使われていて、こちら方がイメージ的にもぴったりかもしれません。

第 1 曲　Quodlibet　　クオドリベ

Vom Himmel hoch：高い空から天使がうたう

ドイツ・プロテスタントのコラールを代表する歌の一つ。ルター作と伝えられていて、バッハも大曲クリスマス・オラトリオなどの作品の中で多用し、バッハにとってのキリスト降誕の「定番」ともいえる。クツィールもその流れを汲んでこのモチーフを冒頭に持ってきたと思われる。

O du fröliche：おお、楽しいクリスマス

「いざ、うたえ」というタイトルで子供向けの讃美歌集にも掲載されているキリスト生誕を称えた曲。8 本の楽器が重厚なハーモニーを奏でる。

Morgen Kinder：子どもたち、明日はいいことがあるよ

イヴの日、子どもたちにキリストの誕生が近いことを知らせる歌。トランペット・ソロに始まる楽しげな旋律が次々と受け渡されてゆくが、そこにはいかにもクツィールらしいサウンドが見え隠れする。

第 2 曲　Es sungen drei Engel　　3 人の天使がやさしく歌う

ゆったりしたコラールと、天使の歌を思わせる可憐な歌が印象的。天使に例えた 3 本のトランペッ

トで演奏される。ヒンデミット作曲の交響曲「画家マチス」の１楽章：「天使の合奏」のテーマがそのまま用いられている。

第５曲　Kommet ihr Hirten　　きたり聞けよ み告げを（羊飼いよ集いて）

イエスの生誕を祝う晴れやかな讃美歌で、原曲は３拍子の民族舞曲風なリズムを持つが、ここではゆったりと厳かに歌われ、細かな装飾が散りばめられている。

第３曲　Stille Nacht　　きよしこの夜

いわずと知れたクリスマス・キャロルの名曲。1818年、ザルツブルク近郊のオーベルンドルフという村の教会の助祭ヨーゼフ・モールが子供達に歌わせようとクリスマス・イブの朝に急に思いついて書いた詩に、近くの教会のオルガニスト、フランツ・グルーバーが即興的に曲を付けたもの。トロンボーン４重奏による様々なヴァリエーションのあと、トランペットも加わった全員の合奏で締めくくられる。

第８曲　Quodlibet　　クオドリベ

In dulci jubilo：甘き歓びのうちに

「もろびと声あげ、よろこび称えよ」の訳もある14世紀ドイツのイタリア風キャロル。バッハも編曲している。

Wie schön leuchtet：いかに麗しく輝くや

前曲のモチーフがトロンボーンで続けられる上に、トランペットが華やかなテーマを奏でる。「いかに麗しく輝くか、あかつきの星は」と歌うキリスト生誕の日の夜明けの美しさを表しているのであろう。やがて、再び「甘き歓びのうちに」が全楽器で再現され、２つの歌は融合し、高らかにコラールを歌いあげ、曲を結ぶ。

WINTER FAIR 開催中！12 月 25 日まで。

JEUGIA 三条本店5F

APEX 管楽器

京都市中京区三条通新京極角

■営業時間　AM10:30 – PM8:30　■TEL　075-254-3750

■E-Mail　apex@jeugia.co.jp　■URL　http://www.jeugia.co.jp

地下鉄東西線「京都市役所前」駅　徒歩５分　京阪「三条」駅　徒歩 10 分

素顔のＫＦＡＢ

～方言編～

KFAB のメンバーのほとんどは、近畿と愛知県の東海道沿線に生息している。それ故 KFAB でのコミュニケーションはもっぱら関西弁だ。「せやなぁ」「ちゃうやん」という具合である。大阪出身の筆者などは至極普通の調子で会話できるわけである。

しかし、同じ関西でも西と東あるいは北と南では違いがあるし無論、名古屋と関西圏ではかなり異なる。そんな事情から、KFAB での会話には時々さっぱり意味のわからない極ローカル表現が出てくることがある。関西弁ネイティブのメンバー同士ですら「何それ～！」と盛り上がるわけである。今回、関西弁の総本山・大阪での初公演にあたり、小生が発見しためずらしい方言？をいくつかご紹介させて頂こう。

○“けった”

自転車のことを名古屋ではこう呼ぶらしい。“けったマシーン”というのが正式名称らしいが、“けった”と“けったマシーン”は違うという説もある。「何で来たん？」「けった！」「(蹴ったぁ？？)」てな具合に頭にハテナマークが飛ぶことになる。

大阪にも“ちゃりんこ”というこれまた強烈なインパクトを持つ表現があるが、もし知らない人が聞いたら、どんなものを想像するのだろう？小生にはさっぱり想像がつかないが、会場の皆さんは如何かな？

○“かう”“つる”

「買う」ではなく「かける」という意味らしい。鍵とかボタンを“かう”のだとか。机を“つる”こともある。「二人で持ち上げる」という意味。「これ、つろうか。」と誘われたら、そこにある机にヒモ巻いてベランダにでも引っかけそうになってはいけない。まず二人で向かい合わせになり、持ち上げて、仲良く隣の部屋まで運ぶのである。

○“みじゃける”

めちゃくちゃに壊れるという意味の自動詞。“みじゃく”と言えば他動詞になるようである。「MD プレーヤーみじゃけたから、録音できやんのやって」という風に使うらしい。

この方言の KFAB デビューは、実はつい最近であった。関西でもかなり限定された地域しか通じないようである。KFAB でも、この動詞を操れる人間は 2 人しかいない。デビューした日は格好の宴会ネタとなったことは想像に難しくないであろう。あ～眠た。

○“にぬき”

ゆで卵のこと。えっ？知ってるって？そうでしょうな。小生も当然使っていて、てっきり関西共通の方言だと思っていた。おでんの仕込みの場面、「そろそろ“にぬき”の殻、みんなで剥いとこか。」と言ったら、小生以外の 3 名は見事に固まったのであった。どうやら大阪とその周辺ぐらいしか通じないようである。煮抜くねんって！

○“やん”

否定の助詞。「見えやん（見えない）」「書けやん（書けない）」という具合に使う。京都なら“へん”、英語なら can't であるが、“やん”の場合はやや強めの否定になる。

KFAB の練習やレッスンの一場面。

弟子：「のの先生！（*）、この曲吹けやん・・・」

先生：「吹けやん言うな！（吹けないと言わずしっかり練習しなさい！）」

弟子：「先生、吹けません・・・」

観客：「(爆笑)」

他にも「飲めやん」「食えやん」「もう音出やん」などがある。KFAB では様々な場面に愛着を持って使われ、定着した感がある。

＊）名古屋フィル首席 Hr 奏者の野々口先生の愛称。我らが KFAB のメンバーでもある。

ブラスアンサンブルの演奏は指揮者をおかないスタイル。演奏者どおし互いのコミュニケーションが中心の練習だ。「この部分はどんな情景をイメージする？」「そこはねぇ・・・・」と言葉を交わす時に発見することも多いのだ。まさに異文化コミュニケーション、かな？

「そうゆぅたら、『素顔』の原稿書いたん？」

（おっとやばい・・・）「いやぁ、それがなぁ、、、、」

「もう締切 1ヶ月も過ぎとるに～！わかっとるぅ！」

（“に～！”やて。どのぐらい怒ってるんかいなぁ。）

「そやで、はよ書きなって言うとんのにぃ。もぉ～。」

「おたくはん、はよ書きぃって言うねん。どすぇ～。」

「早く書けって言っとるだぎゃぁ。なぁ～も。」

（今更白紙なんて言われへんしなぁ・・・・。　よっしゃ、このネタで書こ～！）

つれづれなるままに

ラッパ吹きのエッセイ Vol.10

～ フランドルの息吹 ～

フランドル（フランダース）地方と言えば、現在のベルギーを中心として、
オランダからフランス北部の地域を指す。
フランドルの地では、言語や文化が入り混じりつつもそれらが共存しており、
それは何百年も前から現在に至っている。
高貴さの中にも柔軟な面があり、お互いを受け入れる土壌が育まれてきた。

1400年から1600年頃のルネサンス期に、この地方出身の作曲家がヨーロッパ各地で多く活躍した。
そのフランドル楽派の音楽様式の特徴はポリフォニーと呼ばれる多声音楽であった。

－　ポリフォニー（polyphony）　－
　それぞれの声部がすべて互角に絡み合い、全体の音の綾をなしていくもので、
どの声部にも主従の関係はない。

私たちが目指すアンサンブルは、お互いがそれぞれの音楽を主張しつつも、
それらが時には反発しあい、刺激しあい、協調しあって一つの大きな音楽を生み出す。
結局アンサンブルとは心の繋がりに他ならない。
それぞれの心から滲み出た音楽がある方向を向いたときに感動が生まれる。
それぞれの活きた音楽が偶然にもある瞬間共鳴し、その瞬間が継続していく・・・

ヨーロッパ全域に拡がったフランドル楽派の音楽がそれぞれの地で発展していった。
フランドルで活躍したスザートは、印刷業者としても音楽の記録と伝達に大きな
功績を残している。
ペーテルスそしてクツィールもまさにフランドル出身。

フランドルから発信されたポリフォニー音楽が形を変えて受け継がれ、
私たちの中にも息づいている。

音楽することによる様々な人や事柄との感動的な出会い。
これらを噛み締めながら演奏していたい。

団員名簿

Trumpet
浅野弥生
伊豆田和也
伊豆田恭子
貝發達也
加悦愛子
北村雅紀
北村美繁
鶴田鋼司
能勢秀之

Horn
井田右妥子
北脇知己
來島由明
野々口義典
古市道和

Tuba
竹内信也
峯松勲

Trombone
奥山あや
小野道生
金光泰典
坂根通
田中寿
藤岡信嘉
藤本雅巳
南昌明

Percussion
若松愛彦

演奏者

G. ガブリエリ：「カンツォーンとソナタ集（1615 年）」より ソナタ第 13 番
Ⅰ Chor Tp1 貝發，Tp2 北村（美），Tb1 奥山，Tb2 南
Ⅱ Chor Tp1 能勢，Tp2 伊豆田（和），Tb1 田中，Tb2 小野

B. バルトーク：「こどものために」より
Tp1 伊豆田（恭），Tp2 北村（雅），Hr 井田，Tb 奥山，Tuba 竹内

F. ペーテルス：4 本のトロンボーンのための組曲 作品 82
Tb1 南，Tb2 奥山，Tb3 田中，Tb4 小野

T. スザート：「ダンスリー」より 6 つの舞曲
Tp1 貝發，Tp2 北村（美），Tp3 伊豆田（恭），Tp4 北村（雅），Hr 古市
Tb1 田中，Tb2 南，Tb3 藤岡，Tb4 小野，Tuba 竹内

C. ヘーゼル：あと 1 匹の猫「クラーケン」
Tp1 能勢，Tp2 北村（雅），Tp3 伊豆田（和），Tp4 北村（美），Hr 井田
Tb1 藤岡，Tb2 奥山，Tb3 南，Tb4 小野，Tuba 竹内

G. W. E. フリードリヒ：アメリカン・ブラスバンド・ジャーナル
Tp1 能勢，Tp2 伊豆田（和），Hr 古市，Tb 田中，Tuba 竹内

J. アイヴソン：クリスマス・クラッカー
Tp1 北村（雅），Tp2 北村（美），Hr 井田，Tb 藤岡，Tuba 竹内

J. クツィール：クリスマスキャロル組曲 作品 97
Tp1 貝發，Tp2 伊豆田（恭），Tp3 北村（美），Tp4 能勢
Tb1 奥山，Tb2 南，Tb3 田中，Tb4 小野

京都ファインアーツ・ブラス　第 13 回演奏会

主催：京都ファインアーツ・ブラス
印刷：（株）コームラ

K
F
A
B